

大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(2)

— 出席率, GPA を用いた分析 —

中村 真*・松田 英子**

要 約

中村・松田(2013, 2014)は, 大学生の中途退学率が増加する背景に心理的要因としての大学生の適応力の低下があると考え, 首都圏の4年制大学の学生を対象に質問紙調査を実施した。その結果, 大学不適応に直接影響する要因は「授業理解の困難さ」「大学への帰属意識(大学への愛着)」であったが, 「友人関係」は「大学への帰属意識(大学への愛着)」を媒介して大学不適応に影響しており, 間接的な影響をもつことが示唆された。ここで言う不適応とは, 「大学生活が辛いと感じる」といった, いわゆる主観的な不適応感を指しており, 成績不振や怠学を示唆するものではないが, それらを直接反映するものではなかった。

そこで, 本研究では, 一連の研究で用いた諸変数に大学不適応を客観的に示す指標であると思われる授業の出席率とGPAを加えたうえで, これらの各変数が大学不適応にどのように影響するのかを検討した。その結果, 先行研究と同様に, 授業理解が困難であるほど, 大学への愛着が低いほど大学不適応感が大きくなること, また, 友人関係の良好さは大学への愛着を介して間接的に大学不適応感の低さに影響することが示された。一方, 大学不適応感は, 出席率およびGPAに負の影響を与えていることが示され, 怠学や成績不振, 牽いては, 留年や退学を予測する有効な指標である可能性が示唆された。

キーワード: 大学生, 大学不適応, 大学への帰属意識, 出席率, GPA

問題・目的

中村・松田(2013, 2014)は, 大学生の中途退学率が増加する背景には, 近年の経済情勢の悪化に加えて, 心理的要因としての大学生の適応力の低下があると考え, 首都圏の4年制大学の学生を対象とする調査研究を継続して行い, 大学不適応に影響する要因を検討した。

その結果, 大学不適応に直接的かつ強く影響する要因は, 授業理解の困難さ, および, 大学への愛着(帰属意識)の低さであった。入学目的の明確さも大学不適応に直接的な負の影響を及ぼすが, 影響力はそれほど大きくない。また, 友人関係の良好さは大学不適応に対して直接的にはほと

んど影響しないか, 微弱な負の影響を与えるに過ぎないが, 大学への愛着を媒介して大学不適応を抑制する間接的要因であることが示された(図1)。

ところで, ここでいう不適応とは, 「大学生活が辛いと感じる」「卒業できないかもしれないと思う」といった, いわゆる, 主観的な不適応感を指しており, 成績不振や怠学を示唆するものではないが, それらを直接反映するものではなかった。

そこで, 本研究では, 一連の研究で用いた諸変数に, 大学不適応を客観的に示す指標であると思われる授業の出席率とGPAを加えたうえで, これらの各要因が大学不適応感とどのように関連するのかを検討する。図2は, 本研究において想定する大学不適応感とその関連要因および出席率とGPAの関係を示したモデルであり, 大学不適応感が直接または出席率を媒介してGPAに負の影響を与えることをその骨子とする。

本研究の目的は, まず, 中村・松田(2013,

2014年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科教授 社会心理学

** 江戸川大学 人間心理学科教授 臨床心理学

2014) が明らかにした大学不適應感に影響する要因を再確認することである。そのうえで、これらに出席率とGPAを加えて分析を行うことによって、大学不適應感とその関連要因を検討した一連

の先行研究(松井・中村・田中, 2010; 中村・松井・田中, 2011; 中村・松田, 2013, 2014)における知見をより客観的に検証することを試みる。

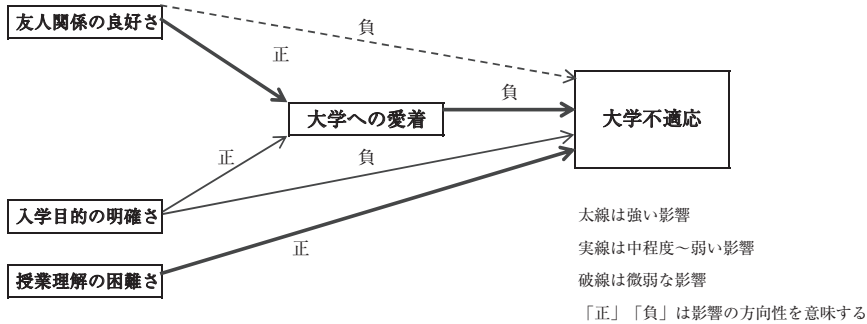


図1 大学不適應に影響する要因間の関係を示したモデル (中村・松田,2013; 中村・松田,2014より)

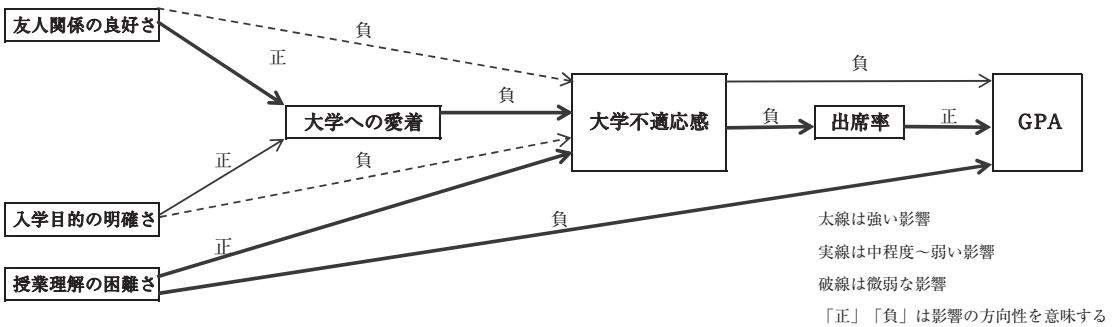


図2 大学不適應感および出席率、GPAに影響する要因間の関係を示したモデル (本研究において想定したモデル)

方法

調査協力者

首都圏にある同一大学の心理学系学科に所属する学生212名(男性109名, 女性103名, 平均年齢19.75歳, SD 1.04)を対象に2014年1月に質問紙調査を実施した。調査対象者の学年と性別の内訳は、表1の通りである。

表1 調査対象者の内訳

	1年	2年	3年	計
男性	41	36	32	109
女性	37	41	25	103
計	78	77	57	212

手続き

調査に先立ち、回答は強制ではなく、評価を伴わず、個人情報の開示されないことを説明し同意を得たうえで、講義時間中に集合調査を実施した。

質問紙調査の内容

中村・松田(2013, 2014)に基づき、大学生活における①授業理解の困難さ(「大学の勉強についていけない感じだ」など4項目)、②入学目的の明確さ(「はっきりとした目的があって大学に入学した」など3項目)、③友人関係の良好さ(「大学に仲の良い友人がいる」など9項目)、④大学への愛着(帰属意識)(私は〇〇大学に愛着がある)

表2 大学不適応感および関連要因を測定するために用いた質問項目

【授業理解の困難さ】 ($\alpha = .78$)

大学の勉強についていけない感じだ
 授業の内容が難しいと思う
 大学の授業のレベルは高すぎると思う
 大学での勉強方法(勉強のやり方)がわからない

【入学目的の明確さ】 ($\alpha = .75$)

はっきりとした目的があって大学に入学した
 なんとなく大学に進学した(※)
 将来の就職(または進学)のことを考えて、現在の大学・学科に入学した

【友人関係の良好さ】 ($\alpha = .93$)

大学に仲のよい友人がいる
 大学にお互いに頼りあえる友人がいる
 大学にいろいろと相談のってくれる友人がいる
 大学に自分に気をかけてくれる友人がいる
 大学で友人と過ごすことが楽しい
 大学での友人関係に満足している
 大学に勉強を教え合う友人がいる
 大学で友人と過ごすことが煩わしい(※)
 大学に勉強を教えてくれる友人がいる

【大学への帰属意識(大学への愛着)】 ($\alpha = .90$)

〇〇大学を気に入っている
 自分にとって、〇〇大学は居心地がよくて、落ち着くことができる
 〇〇大学は自分にとって大切な居場所である
 〇〇大学が好きである
 私は〇〇大学の雰囲気になじめていない(※)
 私は、〇〇大学に愛着がある
 私は〇〇大学に受け入れられていると思う
 〇〇大学の学生であることを誇りに思う

【大学不適応感】 ($\alpha = .76$)

大学生活が辛い(つらい)と感じることがある
 大学をやめようかと思ったことがある
 まだ授業があるのに、意欲がわなくて大学から早めに帰宅したいと思うことがある
 授業がある日なのに大学を休みたくなることがある
 大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある

(※)は、逆転項目

など8項目)、⑤大学不適応感(「大学をやめようかと思ったことがある」など5項目)について、いずれも6件法で回答を求めた(表2)。ここでの「〇〇大学」とは、調査対象者が所属する大学である。また、⑤の大学不適応感は、中村・松田(2013, 2014)における「大学不適応」と同一である。測定尺度の名称を変更して使用する理由は、問題・目的で論じた通りである。

なお、④は、高木(2003)の「組織コミットメント尺度」、越(2007)の「所属集団に基づくアイデンティティの測定尺度」、本多・井上(2005)の「学級集団帰属意識尺度」、野寺・中村(2011)

の「向大学態度尺度」を参考にして、中村・松田(2013)がこれらの一部を引用または大学への帰属意識を測定するのにふさわしい表現に改変し、新たな項目を加えて構成した25項目を因子分析した結果得られた第一因子(「大学への愛着」因子)の項目群である。

調査結果の集計・分析にあたり、①～⑤は「まったくあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「あまりあてはまらない」を3点、「ややあてはまる」を4点、「あてはまる」を5点、「よくあてはまる」を6点とした。また、逆転項目は変換処理を行った。

出席率

調査協力者の2013年度における授業への出席率を算出し、以降の分析に用いた。1, 2年生については、必修科目(1年生4科目, 2年生3科目)の平均出席率(出席回数/授業回数)を個人毎に算出し、3年生は必修1科目および選択5科目のうち履修している科目の平均出席率を個人毎に算出した。

GPA

調査協力者が、大学入学年度から2013年度までに履修登録した全ての科目について、成績評価「優」を3点、「良」を2点、「可」を1点、「不可」を0点として、「(科目ごとの単位数×得点)の合計/(履修登録を行った総単位数)」を個人毎に算出した。

結果

1. 尺度構成, 基本統計および性差の分析

大学不適應感とその関連要因の尺度ごとに算出した α 係数は、.75～.93であった(表2)。十分な内的整合性を有していることが示されたので、逆転項目の変換処理を行ったうえで、全ての回答者について、尺度ごとに評定値の単純合計を項目数で除した平均値を算出し、これらを以降の集計・

分析に用いた。

表3は、各変数の基本統計および性差の分析結果を示したものである。回答者全員の平均出席率は90%と比較的高くなっている。また、女子学生のほうが男子学生よりも友人関係が良好であり($t(207) = -3.73, p < .001$), 出席率が高く($t(205) = -2.41, p < .05$), GPA($t(201) = -4.56, p < .001$)も高いが、その他の変数に性差は認められなかった。

2. 変数間の相関関係

変数間の相関分析を全体および男女別に行った(表4, 表5, 表6)。その結果、男女に共通して、大学不適應感と授業理解の困難さとの間に有意な正の相関がみられ、大学不適應感と大学への愛着、出席率、GPAとの間に有意な負の相関が認められた。また、大学への愛着と友人関係の良好さ、大学への愛着と入学目的の明確さとの間に有意な正の相関がみられた。そして、GPAと授業理解の困難さとの間に有意な負の相関がみられ、GPAと出席率との間に有意な正の相関が認められた。一方、男子学生において大学不適應感と入学目的の明確さとの間に有意な負の相関がみられ、女子学生においてのみ大学不適應感と友人関係の良好さとの間に有意な負の相関が認められた。

表3 各変数の基本統計

	総平均 (SD)	男性 (SD)	女性 (SD)	t 値
授業理解の困難さ	3.26 (0.91)	3.27 (0.90)	3.25 (0.92)	0.22
入学目的の明確さ	3.27 (1.19)	3.24 (1.26)	3.30 (1.12)	-0.37
大学への愛着	3.59 (0.92)	3.58 (0.88)	3.61 (0.96)	-0.19
友人関係の良好さ	4.32 (1.00)	4.08 (0.97)	4.58 (0.97)	-3.73***
大学不適應感	3.79 (1.05)	3.70 (1.09)	3.89 (1.02)	-1.30
出席率	0.90 (0.10)	0.88 (0.11)	0.91 (0.08)	-2.41*
GPA	2.11 (0.54)	1.96 (0.58)	2.28 (0.44)	-4.56***

* $p < .05$, *** $p < .001$

表4 大学不適応感と各変数の相関(全体)

	友人関係良好	授業理解困難	入学目的明確	大学への愛着	出席率	GPA
大学不適応感	-.130 ⁺	.400***	-.158*	-.419***	-.283***	-.373***
友人関係の良好さ		.096	.123 ⁺	.470***	.032	.037
授業理解の困難さ			.023	.041	-.126 ⁺	-.326***
入学目的の明確さ				.287***	-.034	.067
大学への愛着					.091	.077
出席率						.616***

⁺p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

表5 大学不適応感と各変数の相関(男子学生)

	友人関係良好	授業理解困難	入学目的明確	大学への愛着	出席率	GPA
大学不適応感	-.083	.512***	-.213*	-.378***	-.319**	-.514***
友人関係の良好さ		.189 ⁺	.124	.387***	-.070	-.085
授業理解の困難さ			.031	.022	-.172 ⁺	-.376***
入学目的の明確さ				.356***	-.033	.057
大学への愛着					.130	.127
出席率						.597***

⁺p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

表6 大学不適応感と各変数の相関(女子学生)

	友人関係良好	授業理解困難	入学目的明確	大学への愛着	出席率	GPA
大学不適応感	-.247*	.283**	-.100	-.470***	-.283**	-.288**
友人関係の良好さ		.009	.110	.576***	.073	.022
授業理解の困難さ			.015	.061	-.065	-.291**
入学目的の明確さ				.215*	-.047	.071
大学への愛着					.043	.014
出席率						.613***

⁺p<.05, **p<.01, ***p<.001

3. 大学不適応感に影響する要因(重回帰分析)

大学不適応感とその関連要因との関係を検討するために、大学不適応感を基準変数とし、友人関係の良好さ、授業理解の困難さ、入学目的の明確さ、大学への愛着を説明変数とする強制投入法による重回帰分析を行った(表7)。その結果、 $R^2=.339$ でありモデルは有意であった($F(4, 198)=25.403, p<.001$)。標準偏回帰係数は、大学への愛着が有意な負の係数を、授業理解の困難さが有意な正の係数をいずれも0.1%水準で示した。これは、大学への愛着が乏しいほど、また、授業理解が困難であるほど、大学不適応感が高いことを意味する。なお、同様の重回帰分析を男女別に行ったところ、モデルはいずれも有意であり、標準偏回帰係数の正負と有意性も先の分析(表7)と同じ傾向を示した。

次に、大学への愛着を基準変数とし、友人関係

の良好さ、授業理解の困難さ、入学目的の明確さを説明変数とする強制投入法による重回帰分析を行った(表8)。その結果、 $R^2=.273$ でありモデルは有意であった($F(3, 202)=25.344, p<.001$)。標準偏回帰係数をみると、友人関係の良好さ、入学目的の明確さがいずれも0.1%水準で有意な正の係数を示した。友人関係が良好であるほど、また、入学目的が明確であるほど、大学への愛着が高いことを意味する。同様の分析を男女別に行ったところ、モデルはいずれも有意であった。また、標準偏回帰係数の正負と有意性は、女子学生における入学目的の明確さの標準偏回帰係数が有意傾向(10%水準)である点を除けば、先の分析結果(表8)とほぼ同じ傾向を示した。後に行うパス解析において明らかとなるが、これらの結果は図1の因果モデルと概ね整合するものであると言える。

表7 「大学不適応感」の重回帰分析(全体)

	説明変数				F	R ²
	友人関係の良好さ	授業理解の困難さ	入学目的の明確さ	大学への愛着		
大学不適応	.029	.399***	-.062	-.435***	25.403***	.339

*** $p < .001$ 数値は標準偏回帰係数

表8 「大学への愛着」の重回帰分析(全体)

	説明変数			F	R ²
	友人関係の良好さ	授業理解の困難さ	入学目的の明確さ		
大学への愛着	.442***	.003	.231***	25.344***	.273

*** $p < .001$ 数値は標準偏回帰係数

4. GPA に影響する要因(重回帰分析)

大学不適応感とその関連要因および出席率がGPAにどのような影響を及ぼすのかを検討するために、GPAを基準変数とし、大学不適応感、友人関係の良好さ、授業理解の困難さ、入学目的の明確さ、大学への愛着、出席率を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、3つのモデルが得られた。ここでは $R^2 = .458$ で説明率が最も大きいモデル3を採用した($F(3, 199) = 56.100, p < .001$)。表9に示した通り、説明変数として選択されたのは、出席率、授業理解の困難さ、大学不適応感であり、他の変数は除外された。標準偏回帰係数は、出席率が0.1%水準で有意な正の係数を、授業理解の困難さ(1%水準)と大学不適応感(5%水準)が有意な負の

係数を示した。出席率が高いほどGPAが高く、授業理解が困難であるほど、また、大学不適応感が高いほどGPAが低いことを意味し、他の変数はGPAに直接影響しないことを示唆する。

同様の分析を男子学生を対象に行ったところ、2つのモデルが得られ、説明率($R^2 = .475$)が大きいモデル2を採用した($F(2, 101) = 45.686, p < .001$)。表10に示した通り、説明変数として選択されたのは、出席率と大学不適応感であり、他の変数は除外された。標準偏回帰係数は、出席率が有意な正の係数を、大学不適応感が有意な負の係数をいずれも0.1%水準で示した。男子学生においては、出席率が高いほどGPAが高く、大学不適応感が高いほどGPAは低いことを意味する。

表9 「GPA」の重回帰分析(全体)

	説明変数			F	R ²
	出席率	授業理解の困難さ	大学不適応感		
GPA	.560***	-.196**	-.141*	56.100***	.458

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ 数値は標準偏回帰係数

※ステップワイズ法により得られたモデル

表 10 「GPA」の重回帰分析 (男子学生)

	説明変数		F	R ²
	出席率	大学 不適応感		
GPA	.489***	-.359***	45.686***	.475

*** $p < .001$ 数値は標準偏回帰係数
※ステップワイズ法により得られたモデル

表 11 「GPA」の重回帰分析 (女子学生)

	説明変数		F	R ²
	出席率	授業理解 の困難さ		
GPA	.599***	-.251**	37.958***	.442

** $p < .01$, *** $p < .001$ 数値は標準偏回帰係数
※ステップワイズ法により得られたモデル

さらに、女子学生を対象に同様の分析を行った結果、2つのモデルが得られ、説明率 ($R^2 = .442$) が大きいモデル2を採用した ($F(2, 96) = 37.958$, $p < .001$)。表 11 に示した通り、説明変数として選択されたのは、出席率と授業理解の困難さであり、他の変数は除外された。標準偏回帰係数は、出席率が0.1%水準で有意な正の係数を、授業理解の困難さが1%水準で有意な負の係数を示した。女子学生においては、出席率が高いほどGPAが高く、授業理解が困難であるほどGPAが低いことを意味する。

これらの結果は、男女で若干の相違はあるものの、選択されたGPAの説明変数における標準偏回帰係数の有意性と正負の様相は、本研究で想定したモデル(図2)にはほぼ一致する。

5. 出席率に影響する要因 (重回帰分析)

大学不適応感とその関連要因が出席率にどのような影響を及ぼすのかを検討するために、出席率を基準変数とし、大学不適応感、友人関係の良好さ、授業理解の困難さ、入学目的の明確さ、大学への愛着を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、1つのモデルが得られた。説明率 ($R^2 = .068$) はやや低いものの有意であった ($F(1, 201) = 14.658$, $p < .001$)。表 12 に示した通り、説明変数として選択されたのは、

大学不適応感のみであり、他の変数は除外された。標準偏回帰係数は、0.1%水準で有意な負の値を示しており、大学不適応感が高いほど出席率が低いことを意味する。

表 12 「出席率」の重回帰分析 (全体)

	説明変数	F	R ²
	大学 不適応感		
出席率	-.261***	14.658***	.068

*** $p < .001$ 数値は標準偏回帰係数
※ステップワイズ法により得られたモデル

なお、同様の重回帰分析を男女別に行ったところ、いずれも1つのモデルが得られ、大学不適応感が説明変数として選択された。標準偏回帰係数の正負と有意性も先の分析(表12)とほぼ同じ傾向を示し、性差は認められなかった。これらの結果は、本研究で想定したモデル(図2)における大学不適応感と出席率の関係に一致する。

6. 大学不適応感、出席率、GPAに影響する要因間の関係 (パス解析)

次に、先に行った重回帰分析の結果をふまえて、入学目的の明確さ、友人関係の良好さ、授業理解の困難さ、大学への愛着、大学不適応感、出席率、GPAの7変数を用いて、各要因が直接または大

学への愛着を媒介して間接的に大学不適応感および出席率、GPAに影響するという一連の因果関係を想定したモデル(図2)を検証するためにパス解析を行った。回答者全体を対象とするパス解析の結果を図3に、男女別に同様のパス解析を行った結果を図4、図5に示す。適合度指標の値か

ら、いずれのモデルもデータに適合した結果が得られたと言える。

標準化係数の有意性および正負をみると、3つのモデルに共通して、大学への愛着から大学不適応感に対する負のパスと、授業理解の困難さから大学不適応感に対する正のパスがいずれも0.1%

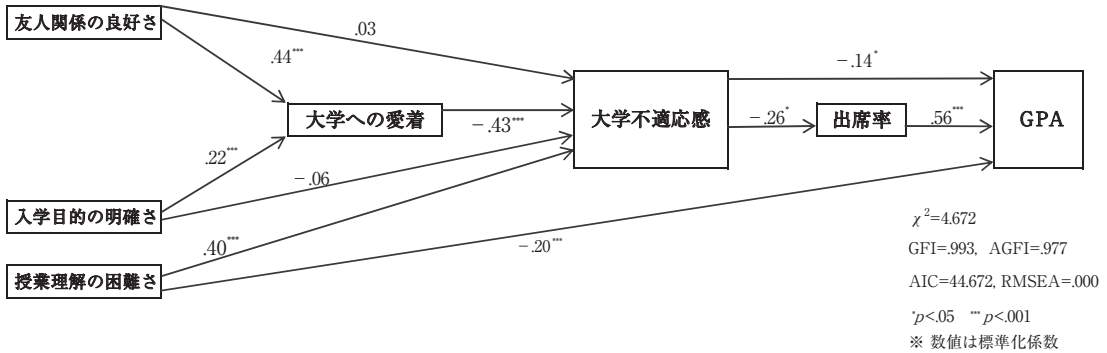


図3 大学不適応感および出席率、GPA に影響する要因間のパス (全体)

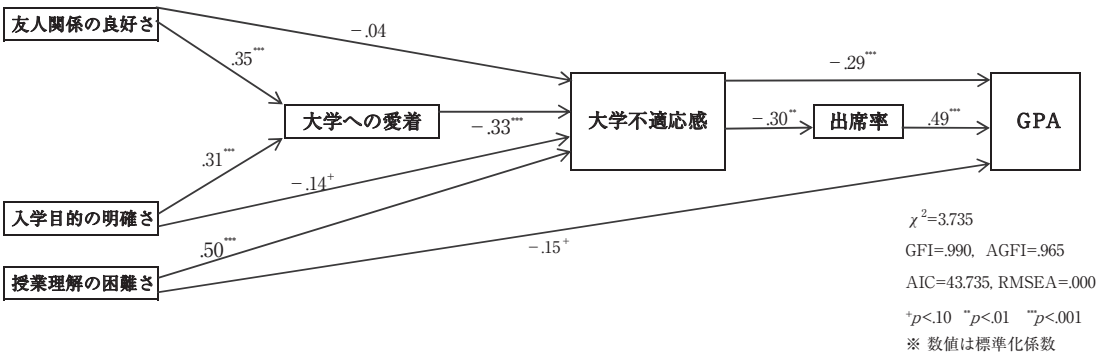


図4 大学不適応感および出席率、GPA に影響する要因間のパス (男子学生)

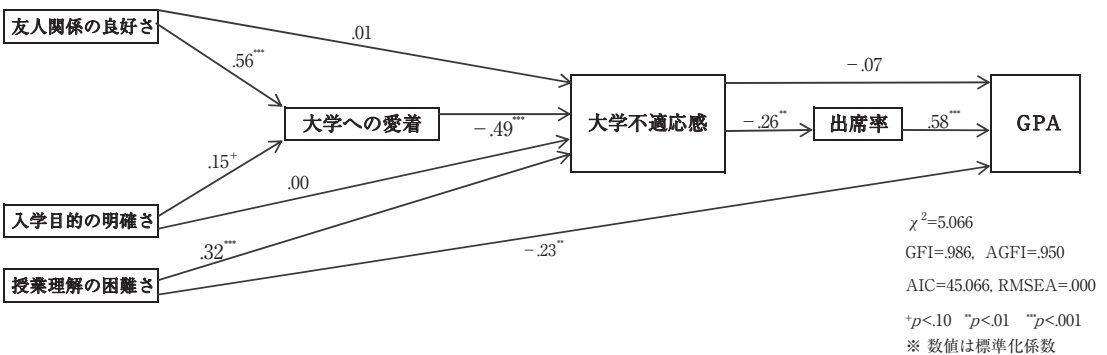


図5 大学不適応感および出席率、GPA に影響する要因間のパス (女子学生)

水準で有意であった。また、友人関係の良好さから大学不適応感へのパスは有意ではないが、友人関係の良好さから大学への愛着に対する正のパスがいずれも0.1%水準で有意であった。そして、大学不適応感から出席率に対する負のパスが男女とも1%水準で有意であり(全体は5%水準で有意)、出席率からGPAへの正のパスがいずれも0.1%水準で有意であった。

一方、男女で変数間の関連のあり方に相違点もみられた。まず、入学目的の明確さから大学への愛着に対する正のパスが男子学生では0.1%水準で有意であるが、女子学生では10%有意傾向であった。また、入学目的の明確さから大学不適応感へのパスが、男子学生では10%有意傾向であった(正の影響)のに対して、女子学生におけるパスは有意ではなかった。そして、大学不適応感からGPAへの負のパスが、男子学生では0.1%水準で有意であったが、女子学生においては有意でなかった。

考 察

本研究の目的は、第一に、中村・松田(2013, 2014)が明らかにした大学不適応感に影響する要因を再確認することであった。具体的には、大学不適応感に対して授業理解の困難さが促進的な影響を及ぼし、大学への愛着(帰属意識)が抑制的な影響を及ぼすこと、そして、友人関係の良好さおよび入学目的の明確さは、大学不適応感に対して直接的には影響しないか、ごく弱い抑止的な影響しか及ぼさないこと、さらに、友人関係の良好さは大学への愛着を媒介して間接的に大学不適応感を抑制する傾向があるかどうかを再検討した。

大学生を対象とする調査の結果、中村・松田(2013, 2014)と同様に、男女に共通して、大学への愛着の低さおよび授業理解の困難さが、大学不適応感に直接的に強く影響する要因であることが示された。また、友人関係の良好さは大学不適応感に直接的には影響しないが、大学への愛着を媒介して間接的に大学不適応感の低さに影響する傾向が認められた。一方、入学目的の明確さにつ

いては性差が見られ、男子学生においては、大学への愛着の高さに強く影響するが、大学不適応感に対してはごく弱い負の影響しか認められなかった。女子学生においては、大学不適応感に直接的には影響しないが、弱いながらも大学への愛着を媒介して大学不適応感を高める傾向がみられた。このように、入学目的の明確さの影響に性差が認められるものの、総合的にみて、本研究においても中村・松田(2013, 2014)が明らかにした大学不適応感とその影響要因との関連性をほぼ踏襲する結果が得られたと言える。

目的の二点目は、出席率とGPAを加えた分析を行うことによって、大学不適応感とその関連要因を検討した一連の先行研究(松井・中村・田中, 2010; 中村・松井・田中, 2011; 中村・松田, 2013, 2014)における知見をより客観的に検証することであった。具体的には、友人関係の良好さや入学目的の明確さによって高められた大学への愛着は、大学不適応感に負の影響を与え、授業理解の困難さは大学不適応感に正の影響を与える。そして、大学不適応感は出席率に負の影響を与え、出席率はGPAに正の影響を及ぼすかどうかを検討する。すなわち、本研究において新たに考案したモデル(図2)を実証することが目的である。

重回帰分析およびパス解析によって、変数間の因果関係を詳細に検討した結果は、想定したモデルを概ね支持するものであった。本研究の調査対象となった大学生は、授業理解が困難であるほど、また、大学への愛着が低いほど大学不適応感が高い傾向にある。また、友人関係の良好さと大学不適応感の間に関連性はみられないが、大学への愛着は友人関係が良好であるほど高い。したがって、友人関係の良好さは大学への愛着を媒介して間接的に大学不適応感を抑制する要因であると言える。同様に、入学目的の明確さも大学への愛着を媒介して大学不適応に負の影響を与える傾向がみられるが、影響力はそれほど大きくない。加えて、大学不適応感は、出席率の低さに影響し、出席率がGPAの高さに影響することが示された。そして、男子学生においては、大学不適応感が直接

GPA の低さに影響する傾向も認められた。

これらの結果は、大学不適応感が怠学や成績不振、牽いては、留年や退学を予測する有効な指標であることを示唆するとともに、一連の先行研究（松井・中村・田中，2010；中村・松井・田中，2011；中村・松田，2013，2014）で得られた大学不適応とその関連要因に関する研究成果をより客観的に裏付けるものであると言える。

文献

- 本多公子・井上祥治 2005 高等学校における学級集団帰属意識尺度作成の試み 岡山大学教育実践総合センター紀要 第5巻 109-117.
- 越 良子 2007 中学生の所属集団に基づくアイデンティティに及ぼす集団内評価の影響 上越教育大学研究紀要 第26巻 357-365.
- 松井 洋・中村 真・田中 裕 2010 大学生の大学適応に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 第21巻第1号 121-133.
- 中村 真・松井 洋・田中 裕 2011 大学生の大学適応に関する研究Ⅱ -入学目的, 授業理解, 友人関係でみた対象者のタイプと大学不適応との関連- 川村学園女子大学研究紀要 第22巻第1号 85-94.
- 中村 真・松田英子 2013 大学生の学校適応に影響する要因の検討 -大学不適応, 大学満足, 就学意欲に着目して- 江戸川大学紀要 第23号 151-160.
- 中村 真・松田英子 2014 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 -帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能- 江戸川大学紀要 第24号 13-19.
- 野寺 綾・中村信次 2011 向大学態度尺度開発の試み 日本福祉大学子ども発達学論集 第3号 71-80.
- 高木浩人 2003 多次元概念としての組織コミットメント -先行要因, 結果の検討- 社会心理学研究 第18巻第3号 156-171.